

津和野町埋蔵文化財報告書

オ ブク ジ
有福寺遺跡発掘調査
概要報告書

1994

津和野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林事務所から委託を受けて津和野町教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は、島根県鹿足郡津和野町大字中曾野に所在する有福寺（おぶくじ）遺跡である。
3. 現地調査は平成4年度に実施し、報告書作成は平成4～5年度にそれぞれ行った。
4. 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

広島県立美術館学芸員　村上　勇氏
島根県教育委員会文化課　熱田貴保氏
津和野町文化財保護審議会会長　銀川兼光氏

5. 調査にあたっては、地元畠地区の方々をはじめ、下記の方々から多大のご協力を得た。記して謝意を表する。

裙坂庄之進　吉田美津子　和田金重　小松龍一　但馬利次　吉田哲男
岡村美佐夫　有田　信江　堀　早苗　民谷研吾　有徳克彦　熊崎啓二
吉井　一寛

6. 調査の体制は下記のとおりである。

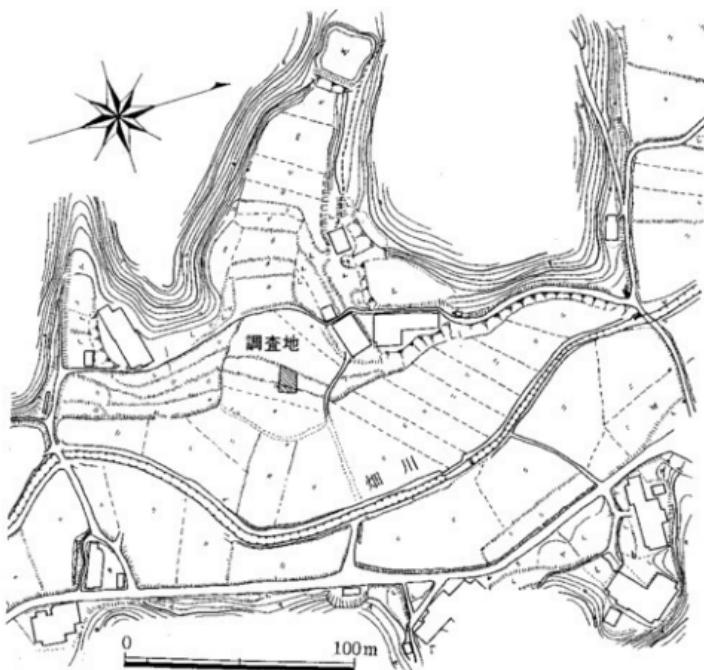
調査主体	津和野町教育委員会教育長	山根津知夫
事務局	津和野町教育委員会教育次長	竹下　宣孝
	文化財係長	広石　修
	文化財係	北浦　弘人(平成4年度)
	"	山本　博之(平成5年度)
調査員	文化財係	北浦　弘人
調査補助員		永田　茂美

7. 出土遺物の整理、報告書の作成には、調査員、調査補助員、および中島由紀、兼子和恵、上田裕子が携わった。
8. 本書の編集、執筆は、北浦が当たった。
9. 調査によって作成された記録類および出土遺物は、津和野町教育委員会に保管されている。
10. 本書に用いた方位は、遺跡分布図および調査地位置図は真北を示し、その他は磁北を示す。

I. 調査にいたる経緯

津和野町では、昭和52年度以来町内各所で圃場整備事業が実施されてきた。津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の保護と事業計画との調整について、圃場整備事業の主体者である鹿足郡津和野町土地改良区並びに島根県益田農林事務所とそれぞれ協議を重ねてきたが、事業計画地内の埋蔵文化財について詳細な分布状況を把握することが急務となった。

昭和61年度に町内中座地区で実施された山口大学及び島根大学両考古学研究室による分布調査を皮切りに、以後津和野町教育委員会により、圃場整備事業関連の埋蔵文化財調査が町内各所で行われている。中座地区的山崎遺跡や町内高田地区の高田遺跡などにおいて、分布調査及び発掘調査が継続的に実施してきた。町内木部地区においては、平成3年度に人形溢遺跡（第2図11）、平成4年度に



第1図 調査地位置図

木蘭遺跡（第2図16）の分布調査が実施され、同地区においても、埋蔵文化財保護のための行政的対応が講じられるところとなっている。

このような折、木部地区において圃場整備の施工中に埋蔵文化財を発見したとの通報が、津和野町教育委員会宛になされた（第2図14）。平成4年7月のことである。現地（第1図）において、田地を掘削して生じた法面に露頭した黒褐色粘質土の遺物包含層から中世期と思われる土師質土器、焼締め陶器、木製の下駄等が出土しているのを確認した上で、工事を中断させた。この時点で遺物包含層の過半は削平されており、遺物は散在していた。遺跡地の立地が谷地形の谷口部分にあたり、地下水脈に恵まれたためか、出土遺物の遺存状態は極めて良く、多量の加工木が包蔵されているようだった。工事地内に係る遺跡の範囲は、約70m²であった。このような状況を踏まえて、島根県教育委員会文化課、事業主体者である島根県益田農林事務所と早速協議した結果、同月中に緊急の発掘調査を実施することとなった。調査の実施形態は、島根県益田農林事務所からの委託により、津和野町教育委員会が調査主体者となって行うこととなった。周知の遺跡ではないため遺跡の名称を決定する必要があり、付近の地名から有福寺（おぶくじ）遺跡と呼称することとした。

II. 調査地の位置と環境

津和野町は、面積139.4km²、人口約7,000人を擁する山陰屈指の観光地である。島根県の西端部に位置し、鹿足郡に属する。県都松江市とは、直線で約160kmの離隔があり、町域の西側では、山口県と県境を接している。町の北東側には日原町、南東側には柿木村が位置し、北側で一部益田市とも境界を接している。白山火山帯の西端にあたる青野火山群の造山活動は、標高989.2mの十種峯や907.6mの青野山などの高峰を育み、当町の地勢を決定づけた。町域を大きく蛇行して流れる津和野川は、今回の調査地が所在する木部地区に源を発し、以下南下を続け、鷲原地区付近で津和野城の城山を迂回して一転北上し、隣接する日原町で高津川と合流、益田市沖の日本海に注いでいる。西石見地方の歴史は、この高津川水系を舞台として展開してきたといえよう。

もと石見国鹿足郡能濃郷と称した津和野の歴史は、町内の高田遺跡や山崎遺跡で押型文土器が出土しており、現在までのところ、縄文時代早期まで遡ることが確認されている。また高田遺跡や大藤遺跡で縄文時代中期から晩期にかけての土器、石器が出土しており、縄文時代をほぼ通じて津和野に遺跡が形成されていた

といえよう。

弥生時代については、高田遺跡で前期の土器が出土し、また高田遺跡や山崎遺跡、西中組遺跡が後期後半の遺跡であることが確認されている。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての時期には、防長地方の素縁の口縁の甕、山陰地方の複合口縁の甕の両者の土器がみられ、陰陽両地方を結んでの盛んな人々の往来があったことが偲ばれる。

現在のところ、津和野町内で確認されている古墳は、木部地区の鍛冶ヶ原古墳群（第2図12）のみである。しかし、町内各所で古墳時代の土師器、須恵器が多数出土しており、他に古墳が存在する可能性は高い。

13世紀以前の津和野の歴史については文献資料が存在せず、唯一考古学的な検証によって辿ることができる。高田遺跡では奈良、平安時代の須恵器、土師器が多量に出土しているほか、綠釉陶器や皇朝十二銭の一種、承和昌寶（836年初鑄）が検出されている。当地が古代の西石見地方の重要な拠点であったことは想像に難くない。

弘安5年（1282年）と伝わる吉見頼行の入部以降、吉見氏による領地経営によって津和野は政治・経済の中核としての体制を整え、慶長5年（1600年）の関ヶ原の役後16年間の坂崎直盛の治領、亀井氏の幕末に至るまでの藩政時代を通じて、城下町として繁栄した。発掘調査によって考古学的にも、中、近世の様相が徐々に明らかになりつつある。

弘安5年の吉見頼行の入部地として伝わる、木曾野川流域の狭小な谷あいには、いくつかの吉見氏ゆかりの旧跡が所在し、これらは総じて昭和54年に津和野町の史跡に指定されている。吉見氏の氏神である木蘭神社や菩提寺である源流寺の跡、吉見氏の墓と伝わる宝篋印塔など、木蘭の谷は往時を偲ばせる環境にある。木蘭遺跡（第2図16）では、館跡の伝承地である字御所屋敷の近辺で青磁や白磁、土師質土器が採集されており、中世期の人跡が確認されている。しかし具体的に居館等の存在を示す考古学的な根拠に欠け、吉見頼行の入部地という説は今のところ伝承の域を出ない。しかしながら、津和野城入城（伝正中元年、1324年）以前の吉見氏の本拠は木部地区にあったとする説を否定する根拠もない。

高田遺跡では、中世の掘立柱建物群が検出され、吉見氏時代の武士団集落の居館跡と推定された。青磁、白磁、染付磁器などの輸入陶磁器類のほか、多数の土師質土器、瓦質土器が出土しており、往時の生活を偲ばせている。遺跡の一部には、金属製品の生産工房と思われる一画があり、鉄釘や金銅製の釘隠し用化粧板などの建築部品のほか、鐵鎌や鎧の小札、鉄砲の玉などの武器、武具類が多数出

土している。この工房遺構に付随すると考えられる祭祀遺構も検出され、その手厚さから推しても、政治、経済、軍事の重要な拠点として、高田遺跡が機能していたことが推察される。津和野城を北東に眺め、吉見氏時代の大手側にあたる喜時雨遺跡を北側に配する高田地区が、吉見氏の本拠地の一画となっていた可能性は高い。

今回の調査地である有福寺遺跡（第2図14）は、木部地区中曾野の畑地区に所在する。木部地区は、津和野地区、小川地区、畑迫地区とともに津和野町を行政的に4つに区分したうちの1つで、町の北西部にあたり、昭和30年の町村合併以前は木部村であった地区である。西側は山口県境と接し、北西から南西にかけて山口県田万川町、須佐町、阿東町と隣接する。また東側は、北東から南東にかけて益田市、日原町、町内畑迫地区と隣接する。地区のほぼ中央を南北に流れる津和野川によって形成された長野盆地（標高230～250m）が、地区内最大の氾濫原であり、面積約1.2km²の広がりをもつ。

長野盆地から南西方向に伸びる谷筋の氾濫原（標高250～300m）は、津和野川の支流吹野川によって形成されたものであり、さらに畑川、木曾野川、絵師川、吹野溢川などの小支流によって狭小で奥深い谷筋が刻まれている。これらの流域には、中曾野と吹野の2地区が所在し、明治8年から、明治22年に町村制施行により木部村が成立するまで、それぞれ中曾野村と吹野村が置かれていた。中曾野は、畑川と木曾野川の流域にあたり、木曾野、中組、畑、小野の各地区の合併によって生じた地名である。吹野は中曾野のさらに上流にあたる。中曾野、吹野両地区的周辺には、仙人山（別名向山 512.8m）や物見岳（626m）、鬼連山（621.6m）といった500～600m級の高峰が連なり、他所へ行くには、吹野川に沿って長野盆地方面、津和野方面に抜ける以外は、峠路の通行を余儀なくされる。吹野の奥部には嘉年坂峠があり、山口県阿東町に抜け、畑川の最上流部の小野には小野峠があり、山口県須佐町に抜ける。

木部地区については、考古学的にはほとんど解明されていないというのが実状である。現在確認されている最古の遺物は、長野盆地の北半は中央部の水田内、長野遺跡（第2図4）で表採された縄文時代晩期の土器片である。長野盆地内ではほかに、西迫尻遺跡（第2図6）や金焼遺跡（第2図5）、原崎遺跡（第2図8）、下山の木部中学校校庭遺跡（第2図10）で磨製石斧が採集されている。また、長野遺跡や鳶ノ子遺跡（第2図7）で土師器片や須恵器片が採集されており、長野盆地内に古代の集落址の存在が推定される。これに対し、吹野川流域では古代の遺物散布地の確認例が少なく、中曾野・中組の人形溢遺跡（第2図11）で磨



第2図 有福寺遺跡周辺遺跡分布図

製石斧が採集されているに留まる。人形埴遺跡では、平成3年度に分布調査が行われているが、遺構の検出に至っていない。小野の鍛冶ヶ原古墳群では、直径5～10m、高さ1～2mの円墳5基が確認されている。未調査であり詳細は不明だが、付近に石材らしき礫の散乱がみられ、横穴式石室を主体部とするものとみられる。鍛冶ヶ原古墳群の存在は、その近辺に同時代の集落の存在を示唆するものであり、今後新たな遺跡の確認が予想される。

中世においては、弘安5年吉見氏入部の地として伝わるように、中曾野地区の随所に遺跡地が形成されてくる。前述したとおり木蘭遺跡の所在する木曾野川の流域は、吉見氏入部の際の居留地と伝えられ、吉見氏ゆかりの旧跡をいくつか訪ねることができる。それぞれのいわれについては今のところ伝承の域を出るものではないが、この地で採集された白磁片の年代は12～13世紀代に比定され、吉見氏との同時代性を示すものであった。木蘭から北東へ約2kmの地点には、徳永城址（第2図15）が位置する。標高320m、比高60mの山頂に設けられた東西約10m、南北約15mの平坦地が、中世城郭の曲輪に比定されている。有福寺遺跡の北西側にあたる丘陵尾根支丘上には丸山遺跡（第2図13）が所在し、土壙墓を伴うと思われる集石遺構が数基確認されている。またこの山麓には、多数の五輪塔や宝篋印塔の部材が確認できる。

有福寺遺跡は、畠川中流域の狭小な谷筋の小氾濫原に面し、丸山遺跡の所在する丘陵尾根の最縁辺部に位置する。現状は水田である。小さな谷の谷口部分にあたり、谷奥には滝迫弁財天社が鎮座した痕跡が残る。社前には大池があり、明治時代まで例祭のたび湖上に舟を浮かべたという。この池から有福寺遺跡方向へ滲み出す水の量は少なからぬものがあり、多くの木製遺物を天然のうちに保存してきた。社のさらに奥には、神木とされる椎の大木が自生し、幹周り4.2mを測る。遺跡地の後背にあたる丘陵端部には、2軒の民家とその少し高位部に畠地があり、若干の平坦面が棚状に段をなしている。これら平坦面の両側には墓所が連なり、五輪塔や宝篋印塔を見ることができる。

参考文献

『津和野町史』第一巻

津和野町史刊行会

『木部誌』

木部の歴史を守る会

『平成4年度町内遺跡分布調査概要報告書』

津和野町教育委員会

『松江考古』第8号

松江考古学談話会

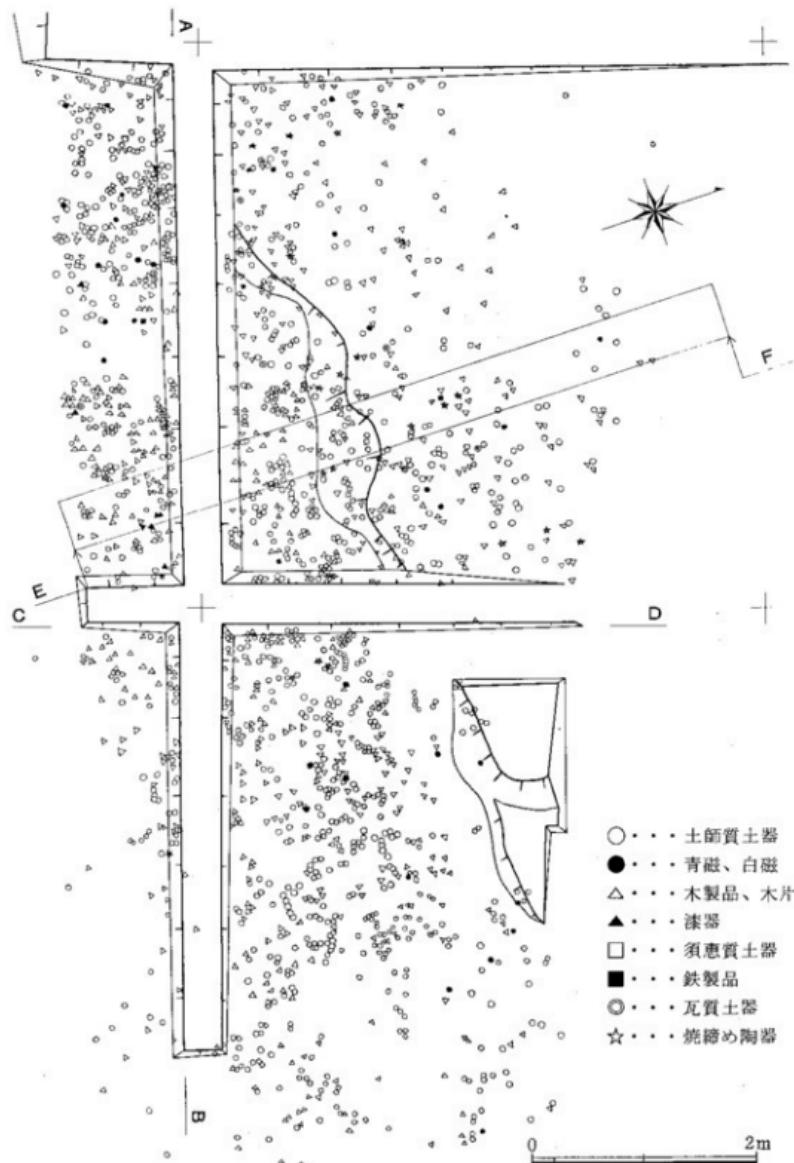
III. 発掘調査の概要

1. 調査の方法と経過

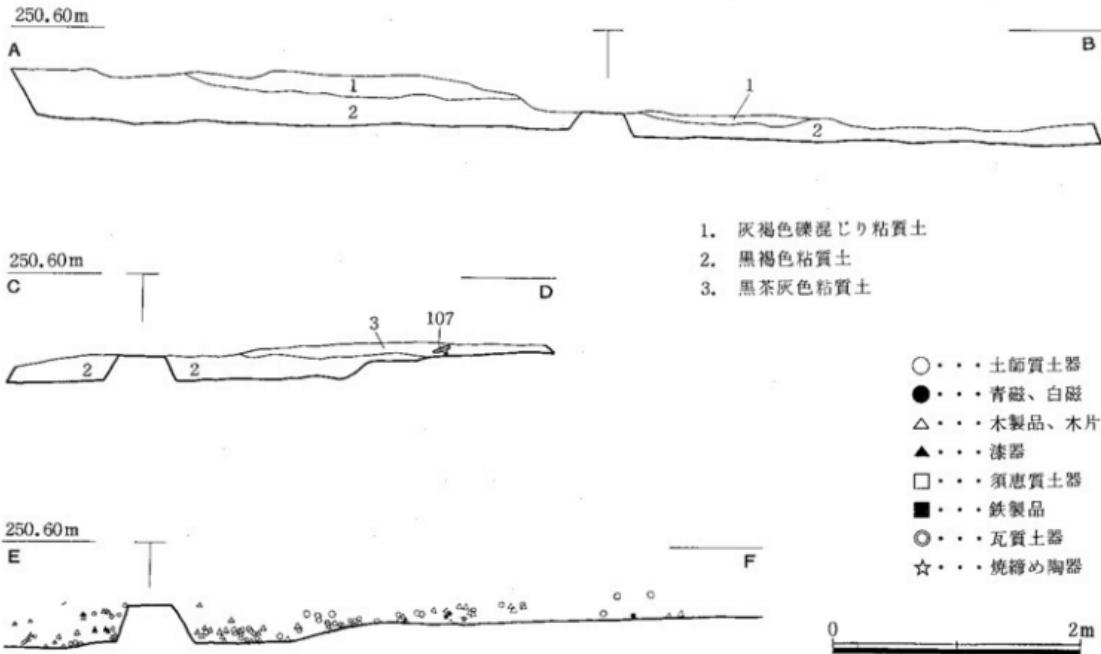
調査は、前述のとおり工事中の遺跡発見という経緯のため、遺跡の過半を欠損しており、施工法面に露れた黒褐色粘質土の遺物包含層の広がりを追求することから着手した。上層の耕作土層と基盤土層を重機により剥ぎ取ると、黒色系と灰色系の粘質土を検出、この時点でこれらの層が平面的に帯状に伸びる形状を示すことが把握できた。この結果、最終的に70m²の面積を調査対象とするものとなつた。調査地には、調査範囲に即して5m×5mのグリッドを設定し、区画ラインに合わせて土層観察用のベルトを設けた。よって調査地は、4つの区画に分けられることとなり、各区画単位で掘り下げを行うこととした。まず、土層観察用ベルトに即してトレンチを設定し、黒褐色粘質土層の上面と下面の両ラインの把握に努めた。黒褐色粘質土層の直下層は茶灰色粘土層となり、以下無遺物層となる。掘り下げに際しては、調査地ほぼ全域より多量の遺物の出土がみられ、出土地点を柱状に残しながら掘り進めた。遺物検出後、遺物出土状況の全景写真を撮影し、併せて適宜遺物出土状況の近接撮影を行った。全体に1m画の測量用メッシュを張り、20分の1スケールの遺物出土ポイント図を作成後、メッシュの1m区画ごとに取り上げを行った。完掘後は、全景写真的撮影後、40分の1スケールの完掘状況図を実測、また20分の1スケールで土層観察用ベルトの断面セクションを実測した。実測に際し用いたレベル高は、調査地近辺を走る県道津和野田万川線沿線の工事用ベンチマーク（海拔 254.223m）から調査現地までの間約 280mを往復して設置したものである。写真は、モノクロフィルムとリバーサルフィルムを各カットで使用した。調査期間中、津和野町立木部小学校6年生一同が社会科の野外学習として、発掘作業に参加した。あいにくの雨の中、泥だらけになりながらの作業となった。調査期間の前半は不順な天候で雨に悩まされ、後半は夏の炎天下にさいなまれ、終始雨避け、日避け仮設テントのお世話になった。悪条件の中、作業に従事していただいた地元の作業協力者の方々のご苦労を、感謝の意を込めて、銘記しておきたい。現地での作業は平成4年7月中旬に終了し、以後諸記録類と遺物の整理を行い、平成5年度に報告書刊行のはこびとなった。

2. 検出遺構の概要（第3・4図）

前述のとおり、上層を除去したところ、帯状に伸びる粘質土の広がりを検出、これを追求したところ、東西に伸びる河川であることを確認した。河川を縦断す



第3図 調査地実測図



第4図 調査地断面図

る形で過半が削平されており、10.25mの長さにわたって遺存していた。面積にして40m²、調査地の57%を占める。また北側部分に、段をなして岸状を呈する部分を7mにわたって検出した。河床のレベル差が東西両端で20cmを測り、西から東へ流れているものと思われ、幅は4m以上になるものと推定される。岸状部分の上端からの深さは平均20cmで、最深部で26cmを測る。断面形は、緩やかな皿状を呈するものと思われる。埋土は、上層に灰褐色礫混じり粘質土（1層）がみられ、下層に黒褐色粘質土（2層）が堆積していた。岸状部分沿いでは、上層に黒茶灰色粘質土（3層）の堆積がみられた。いずれの土層も遺物包含層である。砂礫は、1層でみられるのみで、他の層には混じらず、安定した堆積相が窺えた。遺物の出土は、河川流域のほぼ全域でみられ、調査地の北西部分では、岸状部分より高位側にまで出土範囲が及んでいる。面積にして47m²、調査地の67%を占める範囲である。遺物出土の垂直分布状況は、検出面から河床までほぼ均一に認められた。調査地の南西部部分では、特に遺物の出土密度が高く、これは河川の上流側中央部分にあたる。遺物は、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、焼締め陶器、白磁、青磁、陶器、木製品、漆器、鉄製品が出土している。遺物の年代にやや幅がみられるため、長年の廃棄等により埋積した状況と思われる。一部杭列のなごりらしきものがみられ、本来恒常的な小河川として用水などに使用されていたものと推定される。

3. 出土遺物の概要（第5～10図）

① 土師質土器（第5～7図）

・皿（第5図1）

皿と確認できる個体は、1点のみであった。1は、薄手で精良なつくりである。平底からやや内湾気味に口縁部に至り、口縁端部が若干肥厚する。復元口径15.6cm、底部径5.8cm、高さ3.1cm、厚さ0.25～0.45cmを測り、内外面とも乳茶色を呈する。底部は糸切り後、板目が観察できる。

・椀（第5図2、3）

器形のわかるものはないが、高台を有するものを椀とした。2は、底部径6.4cm、厚さ0.4～0.6cm、高台部高0.5cmを測る。内外面とも乳茶色を呈する。3は、底部径7.2cm、厚さ0.45～0.8mm、高台部高0.5mmを測る。内面乳茶色、外面暗茶灰色を呈する。2、3ともに高台は断面三角形を呈し、底部調整はナデである。

・坏（第5図4～27）

4は、今回出土した杯のうち、口径の最も大きなものである。体部下半でやや屈曲して立ち上がる。復元口径18cm、底部径11.4cm、高さ4.2cm、厚さ0.3~0.55cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りが確認できる。

5は、ほぼ直線的に立ち上がる器形で、復元口径11.8cm、底部径5.2cm、高さ5cm、厚さ0.3~0.65cmを測る。色調は内外面ともに茶白色で、底部は糸切りが確認できる。

6は、外反する口縁部で、端部付近で若干肥厚する。復元口径13cm、底部径7cm、高さ4cm、厚さ0.4~0.9cmを測る。色調は内外面ともに赤茶色で、底部は糸切りである。

7は、体部下半でやや屈曲して立ち上がり、口縁部が若干外反する。復元口径12.8cm、底部径4.8cm、高さ4cm、厚さ0.3~0.8cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りが確認できる。

8は、体部下半で屈曲して立ち上がり、外反する口縁部を呈する。復元口径13cm、遺存高3.7cm、厚さ0.3~0.4cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。比較的薄手で精良なつくりである。

9は、体部下半でやや屈曲して立ち上がり、外反する口縁部を呈する。復元口径15cm、遺存高3.1cm、厚さ0.3~0.6cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

10は、外反する口縁部を呈する。復元口径14cm、遺存高3.3cm、厚さ0.35~0.4cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

11は、外反する口縁部を呈する。復元口径13cm、遺存高4.2cm、厚さ0.3~0.65cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

12は、外反する口縁部を呈する。復元口径12cm、遺存高3.7cm、厚さ0.4~0.45cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

13は、外反の顯著な口縁部である。復元口径13.4cm、遺存高3.7cm、厚さ0.3~0.5cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

14は、体部下半でやや屈曲して立ち上る口縁部を呈する。復元口径14cm、遺存高3.2cm、厚さ0.3~0.6cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。

15は、内湾気味に立ち上る口縁部を呈する。復元口径12.6cm、遺存高3.6cm、厚さ0.4~0.65cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

16は、体部中程で屈曲して立ち上がり、外反する口縁部を呈する。復元口径13cm、遺存高3.5cm、厚さ0.3~0.85cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

17は、体部下半で屈曲して立ち上がり、やや外反する口縁部を呈する。復元口

径11.2cm、遺存高 4.3cm、厚さ 0.3~0.35cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

18は、やや外反する口縁部を呈する。復元口径12.8cm、遺存高3.5cm、厚さ0.3~ 0.7cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。

19は、口縁部付近で若干屈曲して立ち上がる器形を呈する。復元口径12cm、遺存高3.4cm、厚さ 0.3~0.6cmを測り、色調は内面黒褐色、外面淡茶褐色である。

20は、口縁部付近で若干屈曲して外反する器形を呈する。復元口径12.2cm、遺存高 4cm、厚さ 0.4~ 0.6cmを測り、色調は内外面ともに明茶褐色である。体部外面に指頭圧痕が認められた。

21は、若干外反する口縁部を呈する。復元口径12.4cm、底部径4.6cm、高さ4.4cm、厚さ0.35~ 0.8cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

22は、若干外反する口縁部を呈する。復元口径11.2cm、底部径4.8cm、高さ3.4cm、厚さ 0.5cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りが確認できる。比較的器高の低い個体である。

23は、直線的に立ち上がる体部を呈する。復元底部径 9cm、遺存高 3.5cm、厚さ 0.5~ 0.9cmを測り、色調は内外面ともに淡茶色である。底部は板目が確認できる。

24は、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が肥厚する。復元口径10cm、底部径 4.6cm、高さ 4.8cm、厚さ 0.4~ 1cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。

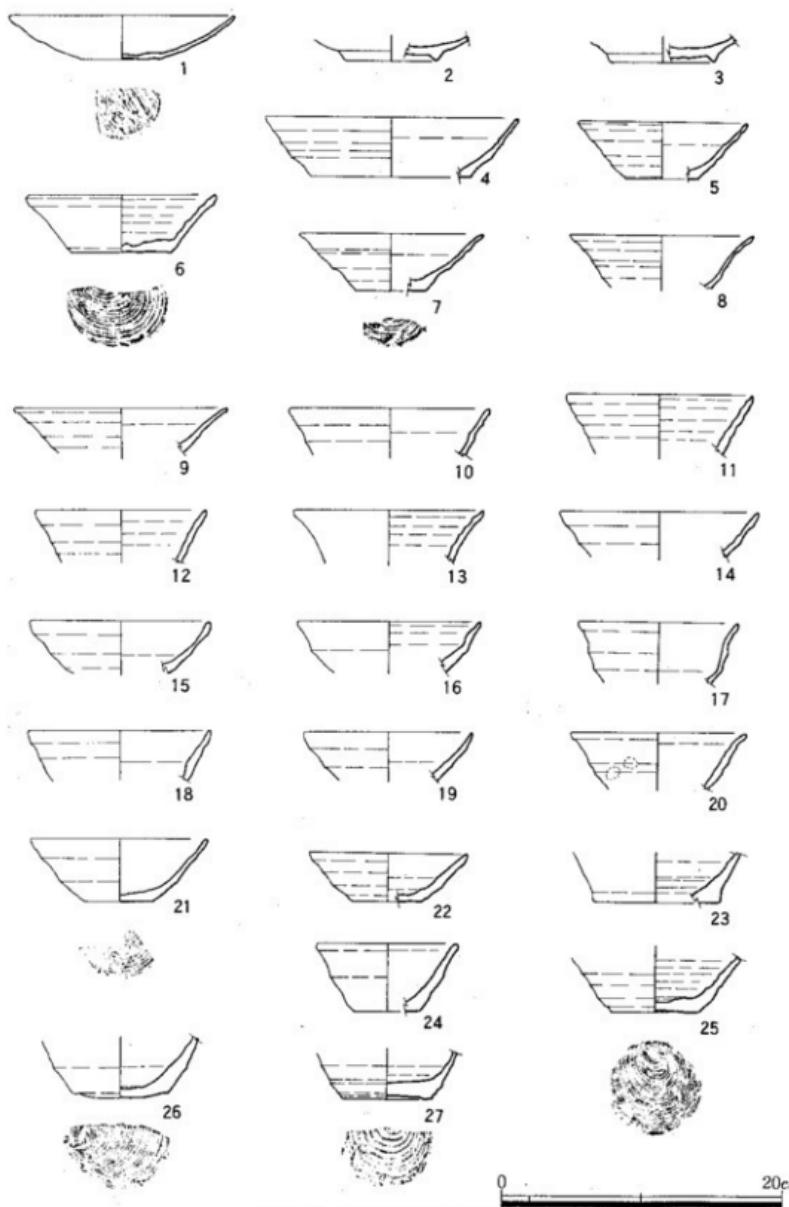
25は、直線的に立ち上がる体部を呈する。底部径 6.2cm、遺存高 4cm、厚さ0.4~0.7cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。底部は糸切りである。

26は、丸みをもって立ち上がる体部で、底部も丸みを帯びる。底部径 6.8cm、遺存高 4.3cm、厚さ0.45~ 1.2cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

27は、丸みをもって立ち上がる体部で、底部は上げ底である。底部径 6.4cm、遺存高 3.4cm、厚さ 0.3~ 1cmを測り、色調は内面暗灰褐色、外面灰褐色である。底部は糸切りである。

・小皿（第6図28~47）

28は、底部から丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 8.2cm、底部径 6cm、高さ 1.9cm、厚さ0.55~ 0.9cmを測り、色調は内外面ともに乳茶褐色である。底部は糸切りである。



第5図 出土遺物実測図1

29は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 7cm、底部径 4.9cm、高さ 2 cm、厚さ 0.4~0.9cmを測り、色調は内外面ともに乳茶褐色である。底部は糸切りである。

30は、外反する器形を呈する。口径 7.2cm、底部径 4.6cm、高さ 1.3cm、厚さ 0.4~0.85cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

31は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 8.4cm、底部径 6cm、高さ 1.3 cm、厚さ 0.35~0.5cmを測り、色調は内面茶褐色、外面淡茶褐色である。底部は糸切りである。

32は、外反する器形を呈する。口径 7.2cm、底部径 5.2cm、高さ 1.2cm、厚さ 0.3~0.45cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。底部は糸切りである。

33は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 6.5cm、底部径 5.2cm、高さ 1.5cm、厚さ 0.25~0.5cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。底部は糸切りである。

34は、外反する器形を呈する。口径 7cm、底部径 3.8cm、高さ 1.1cm、厚さ 0.3~0.35cmを測り、色調は内外面ともに明茶褐色である。底部は糸切りである。

35は、丸みをもって立ち上がる器形で、底部は上げ底状をなす。口径 9cm、底部径 7.9cm、高さ 1cm、厚さ 0.3cmを測り、色調は内外面ともに淡茶褐色である。底部は糸切りである。

36は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 7.2cm、底部径 5.1cm、高さ 2.05cm、厚さ 0.35~0.75cmを測り、色調は内外面ともに淡茶灰色である。底部は糸切りである。

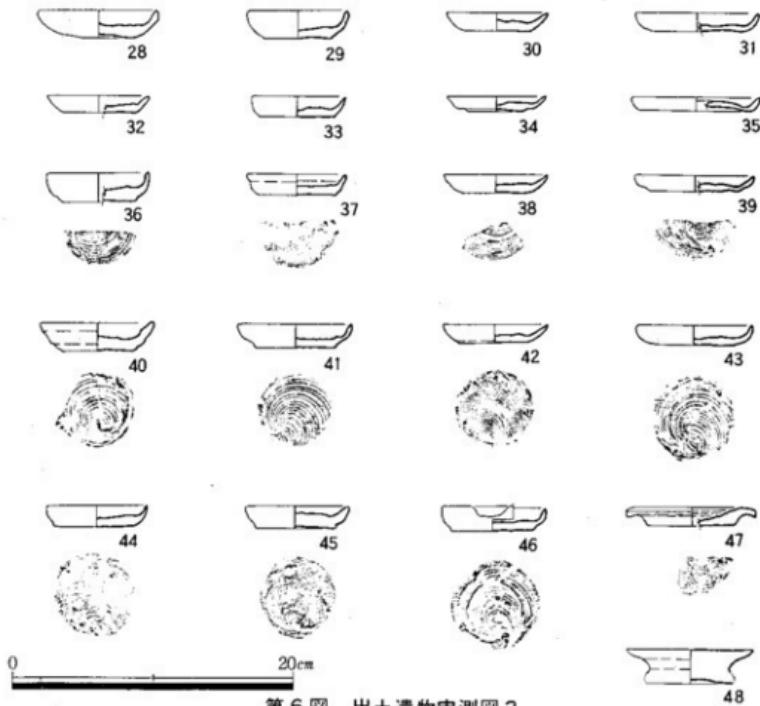
37は、外反する器形を呈する。口径 7cm、底部径 5.4cm、高さ 1.5cm、厚さ 0.25~0.7cmを測り、色調は内外面ともに暗茶褐色である。底部は糸切りである。

38は、外反する器形を呈する。口径 7.4cm、底部径 4.8cm、高さ 1.3cm、厚さ 0.3~0.7cmを測り、色調は内面淡茶灰色、外面乳茶褐色である。底部は糸切りである。

39は、丸みをもって立ち上がる器形である。口径 8.4cm、底部径 6.2cm、高さ 1.1cm、厚さ 0.4~0.6cmを測り、色調は内外面ともに灰褐色である。底部は糸切りである。

40は、外反する器形を呈する。口径 7cm、底部径 5cm、高さ 2.1cm、厚さ 0.4~1.1cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

41は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 7.9cm、底部径 5.4cm、高さ 1.7cm、厚さ 0.3~0.65cmを測り、色調は内外面ともに淡赤褐色である。底部



第6図 出土遺物実測図2

は糸切りである。

42は、外反する器形を呈する。口径 7.4cm、底部径 5cm、高さ 1.3cm、厚さ 0.3 ~ 0.6cmを測り、色調は内外面ともに乳茶褐色である。底部は糸切りである。

43は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 7.8cm、底部径 5.8cm、高さ 1.4cm、厚さ 0.4 ~ 0.65cmを測り、色調は内外面ともに乳茶褐色である。底部は糸切りである。

44は、丸みをもって立ち上がる器形を呈する。口径 7.1cm、底部径 6cm、高さ 1.6cm、厚さ 0.2 ~ 0.8cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

45は、外反する器形を呈する。口径 7.2cm、底部径 5.6cm、高さ 1.6cm、厚さ 0.5 ~ 1cmを測り、色調は内外面ともに乳茶色である。底部は糸切りである。

46は、丸みをもって立ち上がる器形で、口縁部の一部が注口状をなす。口径 7.4cm、底部径 5.8cm、高さ 1.8cm、厚さ 0.25 ~ 0.6cmを測り、色調は内外面ともに明茶褐色である。底部は糸切りである。

47は、口縁部が大きく外半し、端部が垂れ下がる器形を呈す。口径 9.1cm、底部径 6cm、高さ 1.3cm、厚さ 0.4~0.45cmを測り、色調は内面黒灰色、外面乳茶色である。底部は糸切りである。

・台付小皿（第6図48）

48は、全く凹面をなさない身部で、台部は上げ底を呈する。口径 9cm、底部径 6.1 cm、高さ 2.4cmを測り、色調は淡茶褐色である。底部はナデ調整である。

・甕（第7図49）

49は、内傾する胴部が頸部で屈曲し、外反する口縁部を呈する。口径43cm、遺存高 9cm、厚さ 0.6~ 1.3cmを測り、色調は内面暗灰色、外面灰色を呈する。胴部外面格子目タタキで、胴部内面は横方向のハケ調整、口縁部内外面はナデ調整である。

・羽釜（第7図53）

53は、屈曲をもってわずかに外反する口縁部を呈し、口縁部下に厚さ0.65cm、幅 1.1cmの凸帯が付く。口径24.2cm、遺存高 4.2cm、厚さ 0.5~ 0.7cmを測り、色調は内外面ともに赤茶褐色を呈する。内外面ともにナデ調整で、指頭圧痕が確認できる。

・鍋（第7図55、57、58、62）

55は、足鍋の脚である。先端部分を欠き、鍋の体部への貼り付け部分から、角度を変えて斜め下方へ伸びる。断面形は円形に近い。遺存長 9.9cm、径1.5~2.3cmを測る。色調は外側黒褐色、内側茶灰色を呈する。表面がケズリによって細かく面取りされている。

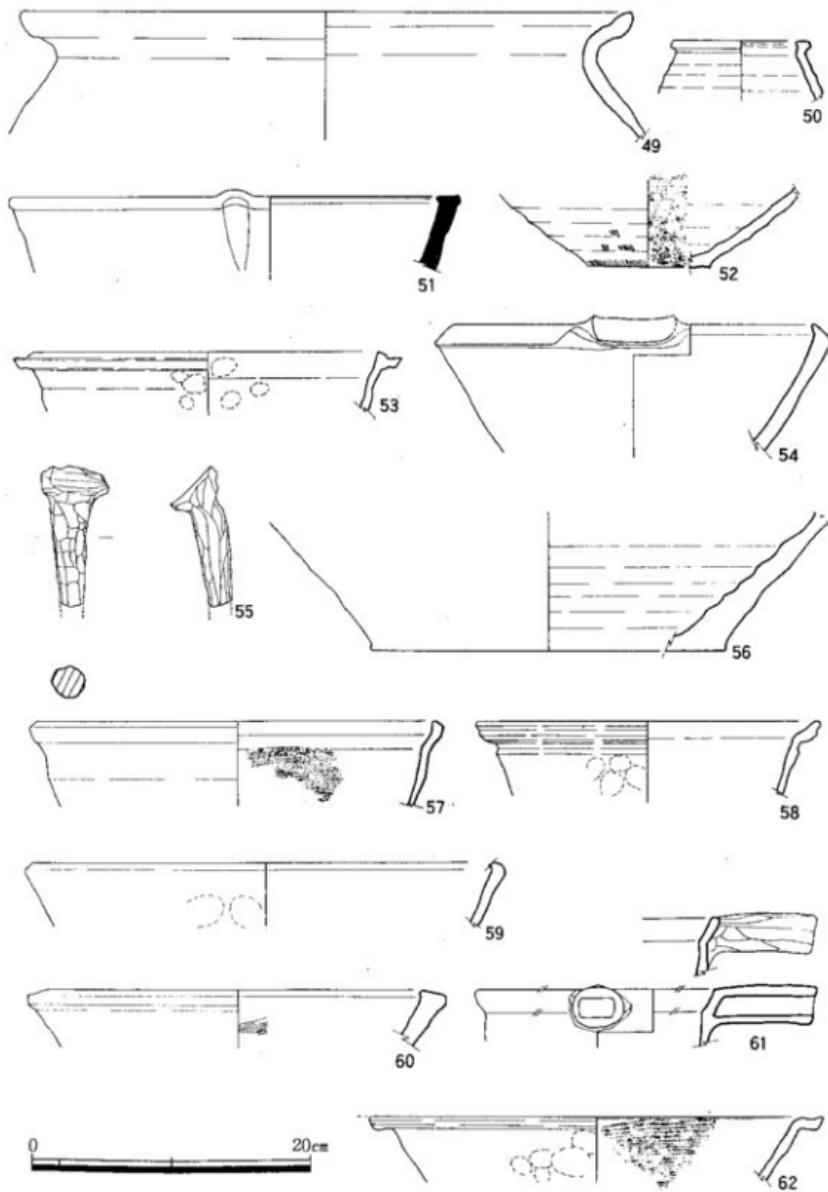
57は、体部から屈曲して口縁部が外反し、端部で肥厚気味にやや内傾する器形を呈する。口径28cm、遺存高 6cm、厚さ0.45~ 0.9cmを測り、色調は内面灰白色、外面黒灰色を呈する。外面ナデ調整で指頭圧痕が確認でき、内面は口縁部がナデ調整で、体部は横方向のハケ調整である。

58は、体部から屈曲して外反する口縁部を呈する。口径24cm、遺存高5.25cm、厚さ0.55~ 0.6cmを測り、色調は内外面ともに淡灰色を呈する。内外面ナデ調整で、指頭圧痕が確認できる。

62は、外反して水平に伸びる口縁部を呈する。口径32cm、遺存高 4.5cm、厚さ 0.6 ~ 0.8cmを測り、色調は内外面ともに黒灰色を呈する。外面ナデ調整で指頭圧痕が確認でき、内面は横方向のハケ調整である。

・擂鉢（第7図59、60）

59は、端部内面をつまみ出す口縁部を呈する。口径34cm、遺存高 4.6cm、厚さ



第7図 出土遺物実測図3

0.7～1cmを測り、色調は内面乳白色、外面黒灰色を呈する。内外面ナデ調整で指頭圧痕が確認できるが、卸目は観察できない。

60は、端部内面をつまみ出し、端部が平坦面をなす口縁部を呈する。口径26.4cm、遺存高4cm、厚さ1.2～2.1cmを測り、色調は内外面ともに乳白色を呈する。外面ナデ調整で指頭圧痕が確認でき、内面は横方向のハケ調整である。卸目は観察できない。

・焰焰（第7図61）

61は、把手部分のみであるが焰焰と判断した。遺存部の形状から、外反する口縁部が想定される。遺存高4cmで、口径は不明である。把手は、断面が楕円形で隅丸方形状に中空となる。把手の長さは7.2cmで、長径3.7cm、短径2.9cm、中空部分は縦2.6cm、横1.5cmを測る。色調は黒灰色を呈する。把手表面はケズリにより面取りされ、体部内面はナデ調整である。把手の下面に煤の付着がみられる。

②須恵質土器（第7図）

・擂鉢（第7図51）

51は、端部を両側につまみ出し、端部が平坦面をなす口縁部を呈する。注口を有する。口径32cm、遺存高5.2cm、厚さ1.2～1.8cmを測り、色調は内外面ともに暗灰色を呈する。外面ナデ調整で、内面は横方向のハケ調整である。卸目は観察できない。

③瓦質土器（第7図）

・甕（第7図52）

52は、平底の底部である。底部径8.8cm、遺存高5.6cm、厚さ0.7～0.9cmを測り、色調は内外面ともに灰白色を呈する。外面ナデ調整で部分的に縦方向のハケメがはいり、内面は横方向のハケ調整で部分的にナデ消している。

④焼締め陶器（第7図）

・壺（第7図50）

50は、内傾する胸部から頸部で屈曲して立ち上がる器形で、端部を両側に肥厚させ、端部が平坦面をなす口縁部を呈する。口径9.2cm、遺存高4.2cm、厚さ0.75～1.1cmを測り、色調は内面淡茶褐色、外面淡赤褐色を呈する。内外面ナデ調整である。備前焼と思われる。

・甕（第7図56）

56は、平底の底部である。底部径25cm、遺存高9.6cm、厚さ1～2.5cmを測り、色調は内外面ともに赤褐色を呈する。内外面ナデ調整である。備前焼と思われる。

・ 横鉢（第7図54）

54は、端部内面をつまみ出し内傾させ、端部が平坦面をなす口縁部を呈する。幅5.6cmの注口を有する。口径25cm、遺存高8.9cm、厚さ1.1～1.3cmを測り、色調は内面淡赤褐色、外面茶褐色を呈する。内外面ナデ調整で、鉢目は観察できない。備前焼と思われる。

⑤輸入陶磁器（第8図）

・ 白磁（第8図63～66）

63は、椀である。面取りされた高台を有し、外面体部下半以下は露胎するが、一部高台部に釉が滴る。内面見込み部分に円形状に沈線が施され、また体部内面にも一条の沈線が走る。底部径4.4cm、遺存高4.4cm、体部の厚さ0.3cm、底部の厚さ0.65～1.2cmを測る。色調は露胎部は灰褐色を呈し、内外面は淡青乳白濁色に発色する。

64は、椀である。断面逆台形を呈する高台を有し、外面は露胎、内面に灰白色の釉がかかる。体部内面に一条の沈線が走る。底部径6.8cm、遺存高2.4cm、体部の厚さ0.5cm、底部の厚さ0.8cmを測る。色調は露胎部灰褐色を呈する。

65は、皿である。平底で、底部は露胎、体部内外面に釉がかかる。内面見込み部には草花文が施され、体部との境に沈線文が巡る。底部径5cm、遺存高0.8cm、体部の厚さ0.4cm、底部の厚さ0.65cmを測る。色調は外面灰白褐色、内面灰綠褐色に発色する。貫入がみられる。

66は、皿である。平底で、底部は露胎、体部内外面に釉がかかる。内面見込み部には草花文が施されている。底部径3.8cm、遺存高0.8cm、体部の厚さ0.4cm、底部の厚さ0.6cmを測る。色調は内外面とも灰綠褐色に発色する。

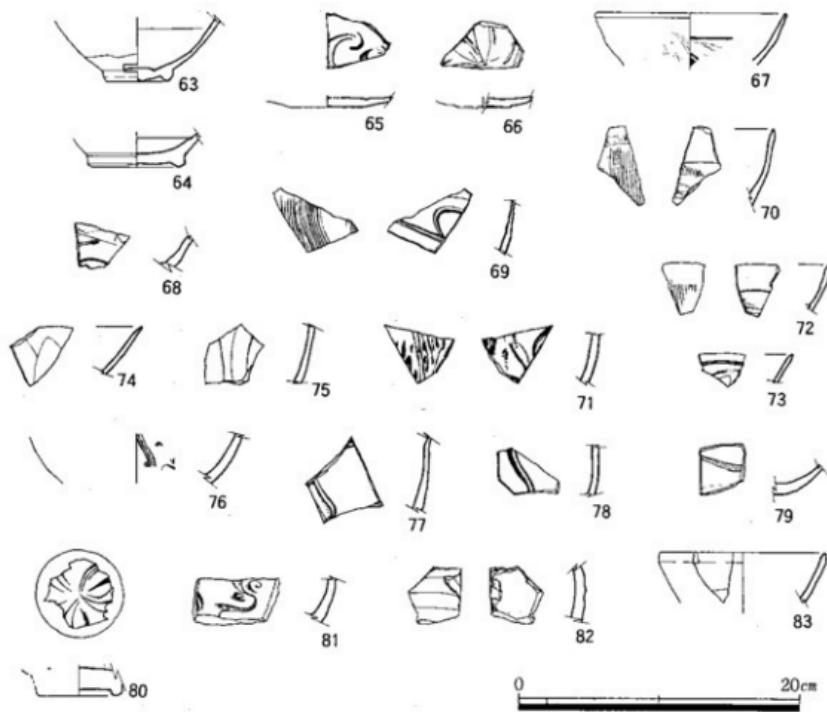
・ 青磁（第8図67～81）

67は、椀である。口唇部外面に浅いくぼみがあり、その下部に櫛目による文様がはいる。内面には櫛による列点刺突状の草花文が施される。口径13.4cm、遺存高3.7cm、厚さ0.3～0.45cmを測る。色調は内外面とも緑黃褐色に発色する。

68は、器種不明であるが、体部下半部の破片と思われる。内面に67と同様の草花文が施され、見込み部分に円形状に沈線が巡る。厚さ0.5～0.7cmを測る。色調は内外面ともに淡綠灰色に発色する。

69は、椀の体部上半部の破片と思われる。外面には櫛目による施文がみられ、内面に片彫りによる草花文が施されている。厚さ0.25～0.45cmを測る。色調は内外面ともに乳綠灰色に発色する。

70は、椀の口縁部片と思われる。外面には櫛目による施文がみられ、内面にへ



第8図 出土遺物実測図4

ラによる列点刺突状の草花文が施されている。厚さ 0.4~0.5cmを測る。色調は内外面ともに淡緑灰色に発色する。

71は、器種不明の破片である。内面に67、68と同様の草花文が施され、外面には櫛目による施文がみられる。厚さ 0.7cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。

72は、椀の口縁部片と思われる。外面には櫛目による施文がみられ、内面に櫛による列点刺突状の草花文が施されている。厚さ 0.3~0.4cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色を呈するが、全体に釉の発色が悪い。

73は、椀の口縁部片と思われる。内面に草花文が施されている。厚さ 0.3~0.35cmを測る。色調は内外面ともに暗青灰色に発色する。

74は、椀の口縁部片と思われる。外面に蓮弁文が施されている。厚さ0.3~0.4cmを測る。色調は内外面ともに暗緑色に発色する。

75は、椀の体部上半部の破片と思われる。外面に有鎬の蓮弁文が施されている。厚さ0.5cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。

76は、椀の体部下半部の破片と思われる。内面に草花文が施される。厚さ0.5~0.7cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。

77は、椀の口縁部付近の破片と思われる。内面に76と同様の草花文が施される。厚さ0.3~0.7cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。

78は、椀の破片と思われる。内面に76、77と同様の草花文が施される。厚さ0.5cmを測る。色調は内面淡緑色、外面淡緑灰色に発色する。

79は、椀の体部下半部の破片と思われる。内面に76~78と同様の草花文が施される。厚さ0.45~0.8cmを測る。色調は内外面ともに暗緑灰色に発色する。

80は、椀の底部片と思われる。高さ0.4cmの高台が付く。見込みに草花文が施される。底部径5.4cm、遺存高2cm、厚さ1.6cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。意図的な打掻きと思われ、円盤状土製品というべきか。

81は、椀の破片と思われる。内面に草花文が施される。厚さ0.6~1cmを測る。色調は内外面ともに緑灰色に発色する。

67~73は同安窯系、74~81は龍泉窯系の青磁である。

・天目（第8図82）

82は、天目である。器種不明だが、外面に4条の鈍い稜線が観察される。厚さ0.7cmを測る。内外面ともに茶褐色に発色し、胎土は白灰色を呈する。接合、補修に供されたとみられる、漆と思われる黒色物質が断面に付着している。

・朝鮮製陶器（第8図83）

83は、朝鮮製陶器の椀である。外反する胴部が、口縁部付近でやや直立気味になる。口径11.6cm、遺存高3.5cm、厚さ0.4~0.5cmを測る。内外面に乳灰色の釉がかかる。貫入が認められる。李朝時代の製品とみられる。

⑥木製品（第9図84~102、第10図103~107）

84は、椀である。底部に高台が二重に巡る。高台部の復元径は、外側が6.6cm、内側が4.4cmで、遺存高1.8cm、厚さは0.2~0.4cmを測る。

85は、漆器の破片である。椀になると思われる。内外面に黒色の漆が塗布されている。厚さは0.5cmを測る。

86~90は、箸と思われる。いずれも先端を削り尖らせており、86は、遺存長8cm、最大径0.8cm、87は、遺存長10.1cm、最大径0.8cm、88は、遺存長10cm、最

大径 0.8cm、89は、遺存長12.1cm、最大径0.65cm、90は、遺存長14.4cm、最大径0.6cmをそれぞれ測る。

91は、縦方向に欠損しているが、へら状木製品か。長さ15.6cm、遺存幅1.65cm、厚さ 0.5cmを測る。先端部を研ぎ出している。

92は、杓子である。長さ21.2cm、幅 5.7cm、厚さ 0.8cmを測る。先端部を研ぎ出し、握柄を設けている。

93は、用途不明である。長さ14cm、幅 1.6cm、厚さ 0.9cmを測る。紡錘形をなし、片側の先端部分に切り込みを入れている。糸または紐をくくりつけるためのものか。

94は、用途不明である。長さ 7.3cm、幅 1.5cm、厚さ 0.9cmを測る。中央部分に切り込みを入れている。糸または紐をくくりつけるためのものか。

95は、用途不明である。小判型で、長径 8.6cm、短径 5.7cm、厚さ 0.7cmを測る。中央部分に穿孔がみられる。

96は、用途不明である。琴柱様で、アーチ形の上部分に長方形の切り込みがはいる。幅 8cm、縦 3.4cm、厚さ 0.6cmを測る。調度品の部材か。

97は、用途不明である。円弧の上辺部分に装飾的な切り込みがはいる。下辺の小口には3カ所の穿孔がみられ、楔様に先の尖った小木片が差し込まれた状態で遺存していた。何かと接合されていたものと思われる。長さ10cm、幅 2.8cm、厚さ 0.5cmを測る。調度品の部材か。

98は、用途不明である。多角形の板で、小さな穿孔部分に楔様に先の尖った小木片が差し込まれた状態で遺存していた。長さ20.2cm、幅 8.4cm、厚さ 0.8cmを測る。折敷の一部か。

99は、用途不明である。半円形に遺存する板である。長さ16.6cm、幅 6cm、厚さ 0.9cmを測る。曲物の底か。

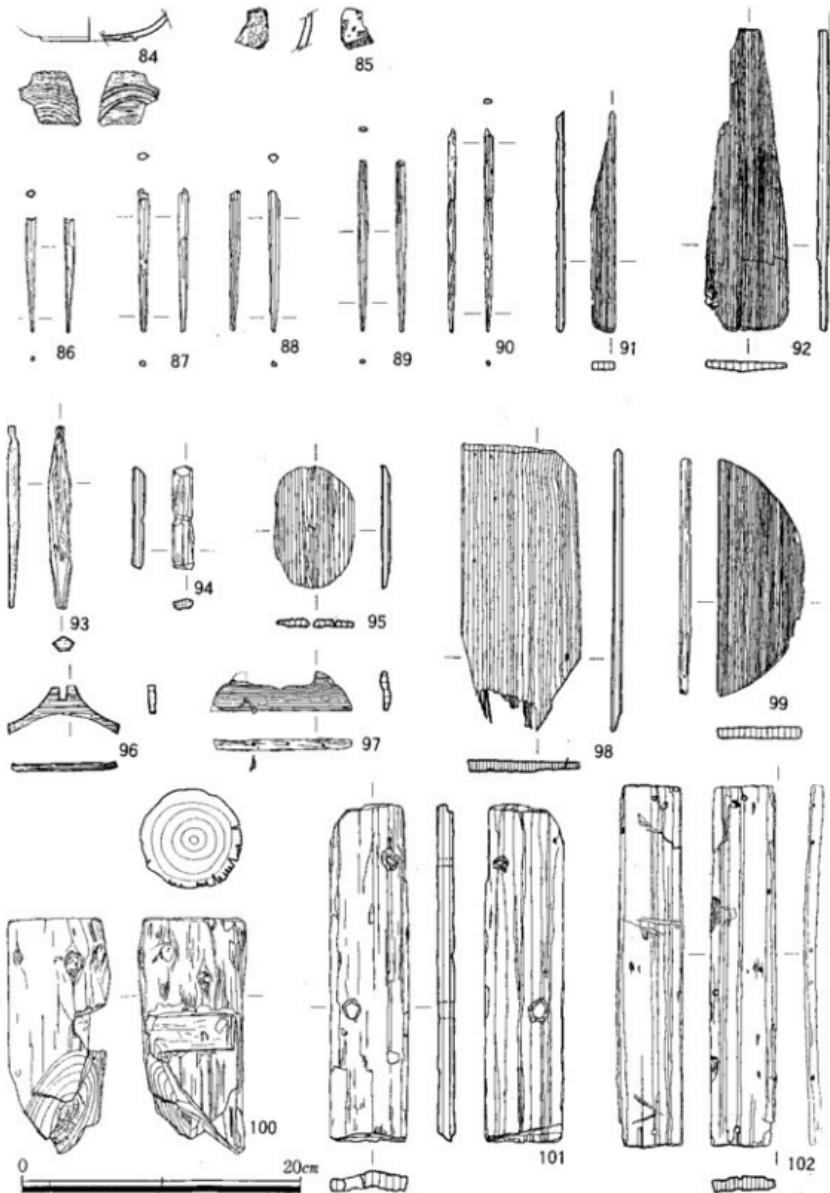
100は、建築部材と思われる。片側を尖らせ、ほぞ穴が切ってある。長さ16.6cm、径 7.5cmの円材である。

101は、2穴を有する長方形状の板材で、長さ24cm、幅 5.5cm、厚さ 1.2cmを測る。

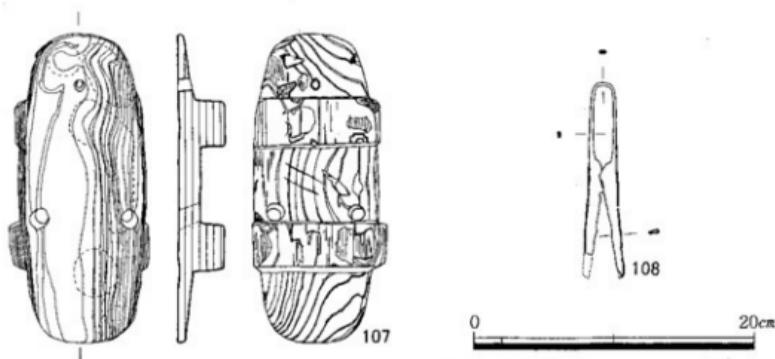
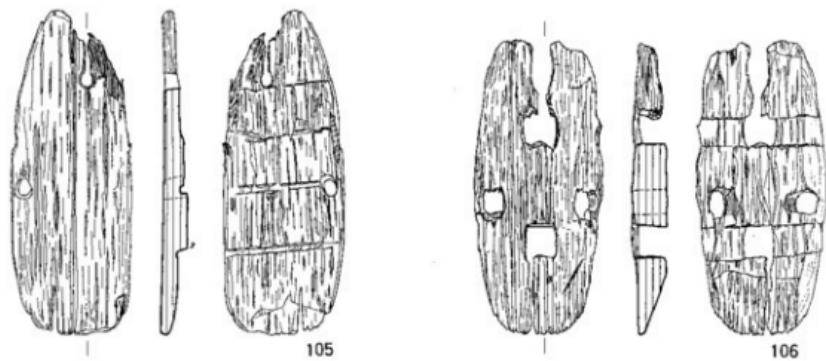
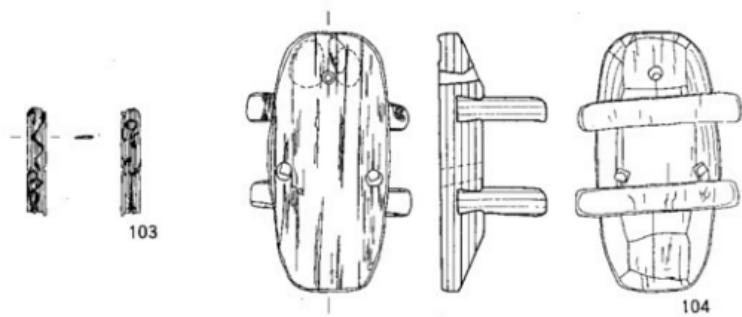
102は、6カ所の穿孔を有する長方形状の板材で、長さ25.8cm、幅 4.5cm、厚さ 0.9cmを測る。側面にも5カ所の穿孔がある。

103は、木簡か斎櫛と思われる。長さ 7.6cm、幅 1.3cmで、両面から墨書されている。判読不明。

104は、下駄である。差歎で、台形状の板が2枚差し込まれており、上からみ



第9図 出土遺物実測図5



第10図 出土遺物実測図 6

ると歯がはみだしてみえる。鼻緒用に3穴が穿たれ、上からは円形に、下からは方形にあけ、貫通させている。長さ18.3cm、幅8.6cm、高さ7.5cmを測る。左足用か。

105は、歯を欠損した連歯の下駄である。鼻緒用の穿孔が2カ所みえるが、本来もう1カ所あった部分が欠損しているものと思われる。長さ22.8cm、幅8.4cm、遺存高2.3cmを測る。

106は、歯を欠損した差歛の下駄である。鼻緒用の穿孔3カ所と歯装着用の穿孔2カ所が確認できる。長さ20.8cm、幅9cm、遺存高2.5cmを測る。

107は、連歯の下駄である。鼻緒用の穿孔3カ所が確認できる。長さ21.7cm、幅8.9cm、高さ3.4cmを測る。足形が確認できるほどよく履きこまれている。右足用か。

⑦鉄製品（第10図108）

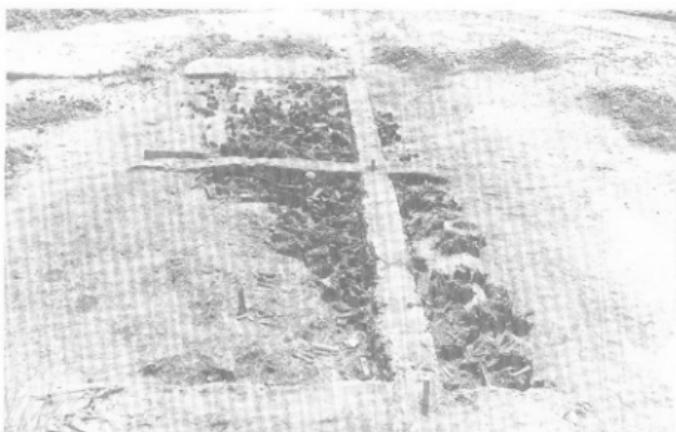
108は、握りはさみである。刃先が反って、常に開く形状を呈する。長さ13.7cm、幅2.2cmを測る。

IV. 小 結

今回の調査では、遺物で埋積した河川が検出された。限られた面積ではあったが、土器類はコンテナボックス2ケース、木製品・木片は10ケースの出土をみた。検出された遺物包含層の厚さを考慮しても、高い出土密度といえよう。土器類の大半は、土師質土器の壺や小皿が占めており、木製品の内容などからみても、日常生活用品の廃棄場といった観がある。遺跡近辺の生活適地と考えられる空間は、すべて集落遺跡の候補地であろう。

その時期については、室町期という少し大ざっぱな位置付けを与えておきたい。第7図54の備前焼播鉢は、間壁編年のN期の古相にあたり、これを15世紀前半期に当てるに、第8図83にみられるような李朝系陶器の普及年代としては、幾分早いものとなる。青磁、白磁の年代観からいえば齟齬はないが、第7図51の須恵質土器の播鉢など、どちらかといえば15世紀の前半に近い位置付けをしておきたい。15世紀には、吉見氏による当方の経営はほぼ安定したものになっていったと思われ、徳永城などの支城を拠点とした支配体制が確立されていたと考えられる。有福寺遺跡に係る集落は、このような体制を支える集団の一つであったと推察される。

図版 1

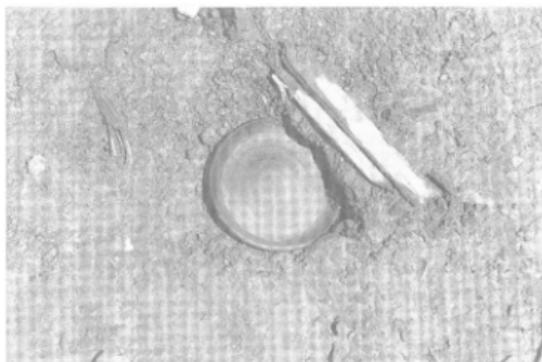


遺物検出状況（西から）



河川完掘状況（西から）

圖版 2



土師質土器出土状况



備前燒（56）出土状况



白磁（63）出土状况

図版 3



下駄（107）出土状況



漆器（85）出土状況



はさみ（108）出土状況

津和野町埋蔵文化財報告書
有福寺遺跡発掘調査概要報告書
平成6年3月 印刷・発行
編集・発行 津和野町教育委員会
印 刷 所 坂田印刷(津和野町)

